

第25回 第3章 近世社会の形成と庶民文化の展開

## 新しい学問の形成と化政文化

執筆・講師  
佐伯英志

### 学習のねらい

江戸時代中期から後期にかけては、西洋の知識に対する関心が高まり、さまざまな学問がオランダを通して日本に入ってきた。これを蘭学と呼んだが、具体的にどのような学問が日本に入ってきて、どのような影響を与えたのだろうか。また、江戸の町人を主な担い手とした文化が最盛期を迎えた（化政文化）。どのような背景のもとに、どのような文化が繁栄したのか、具体的に探っていこう。

### 蘭学から洋学へ

「鎖国」政策の影響により、江戸時代の前半は、西洋の文化に対する関心は一般的に低かった。しかし、8代将軍・徳川吉宗は禁書をゆるめ、西洋の学問を取り入れようとした。当時、ヨーロッパ唯一の貿易国であったオランダを通して日本に伝えられた西洋の学問は、蘭学と呼ばれた。

将軍・吉宗は、青木昆陽らにオランダ語を学ばせたほか、天文学に興味をもって天体観測をおこない、暦もより正確なものにしようと考えた。平賀源内は、起電機（エレキテル）や寒暖計をつくり、人々を驚かせた。杉田玄白・前野良沢らは、オランダ語の解剖書の正確さに驚き、これを翻訳して『解体新書』を刊行した。伊能忠敬は、西洋の天文学や測量術を学び、弟子とともに全国を歩いてまわり、非常に正確な『大日本沿海輿地全図』を作成した（完成は忠敬の没後）。

このように、西洋からさまざまな学問が伝わり、日本人の手によって進展を見せた。幕末に日本が開国すると、窓口がオランダだけではなくなったため、蘭学は洋学と呼ばれるようになり、ますます発展した。これらの学問は、日本の近代化をおしすすめる基礎となった。

### 化政文化

江戸時代後期には、貨幣経済が浸透して江戸の武士や町人の生活が華美になり、大都市に成長した江戸の町人を中心とした文化が栄えた。19世紀初頭の文化・文政年間に最盛期を迎えたこの文化を、化政文化と呼ぶ。

江戸時代後期には、庶民の初等教育機関である寺子屋が、都市や農村にも広く普及した。寺子屋では、生活に必要なこととして主に「読み・書き・そろばん」が教えられた。庶民の識字率が向上したことにより、さまざまな文学作品が出版されるようになった。庶民の旅を扱った

じっぺんしゃいっく とうかいどうちゅうひざくりげ  
十返舎一九の『東海道中膝栗毛』や、湯屋での会話を扱ったしきていさんば うきよぶろ  
『式亭三馬の浮世風呂』などの笑  
いを誘う本や、きょくていばきん なんぞうさとみ ほっけんでん  
曲亭馬琴の『南総里見八犬伝』などの長編小説が愛読された。

また、役者絵や美人画のような浮世絵も広く親しまれた。多色刷りの版画は錦絵と呼ばれ、  
大量に制作されたため、安価に手に入れることができた。うたがわひろしげ とうかいどうごじゅうさんつき かつ  
歌川広重の『東海道五十三次』や葛  
しかほくさい ふがくさんじゅうろっけい  
飾北斎の『富嶽三十六景』などは、庶民の旅行ブームと相まって人気を博した。これらの浮世  
絵は、のちにヨーロッパの印象派の画家たちにも大きな影響を与えた。

## 庶民の生活

人口およそ 100 万人の大都市だった江戸の庶民の多くは、長屋と呼ばれた賃貸住宅に住んで  
いた。狭い空間に多くの人間が暮らしていたため、江戸の町人地の人口密度は、1 平方キロ  
メートルあたり約 6 万人にも達していた。火災も多かったため、家には必要最低限の物しか持  
たなかったが、生活の知恵をしぼり、工夫を凝らして、精神的に豊かな生活を送っていた。

庶民にとって身近な娯楽は、芝居小屋で歌舞伎を見たり、寄席で講談や落語などを聞いたり  
することであった。社寺の縁日や開帳、彼岸や盆の行事なども盛んであった。旅も盛んであり、  
名所見物や物見遊山をかねて、遠隔地の寺社をグループ（講中）で参詣することも多くおこな  
われた。なかでも伊勢神宮に参詣する伊勢参りは盛んであった。

このように、庶民が文化の担い手になったことも、江戸時代後期の特徴の一つである。